Osaka University Knowledge Archive

Title	２０世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化
Author(s)	金, 愛蘭
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57843
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【7】

氏　　名	金（きむ）　愛（え）　蘭（らん）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３３２０　号
学位授与年月日	平成21年９月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化
論文審査委員	（主査） 教　授　石井　正彦 （副査） 教　授　田野村忠温　　教　授　蜂矢　真郷

論文内容の要旨

本論文は、20世紀後半の新聞語彙に「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」という現象が生じていることを、大規模な通時的コーパスにもとづく計量的な調査と、特定の外来語に注目した事例研究とによって実証し、そうした抽象的な外来語の基本語化現象が、和語や漢語の類義語があるにもかかわらずなぜ生じたのかを、とくに20世紀後半の新聞文章の変化と関連付けて考察するものである。論文の本体は、序章・３部構成の本論・終章とから成り、別に参考文献一覧と付表２編を備える。その分量は、Ａ４判162頁（本体112頁）、400字詰め原稿用紙換算約580枚である。

序章では、「外来語の基本語化」の概念を規定し、とくに、「抽象的な意味を表す外来語の基本語化」が日本語にとって重要かつ深刻な意味をもつことを指摘して、その実態解明と要因分析のためには、(1)大規模な「通時的新聞コーパス」の作成、(2)基本語化した外来語の発見、(3)個別の外来語についての基本語化の過程の記述、(4)抽象的な外来語の基本語化にみられる類型や要因の発見、が必要であることを述べる。

第１部では、20世紀後半における（抽象的な）外来語の基本語化現象を概観するために、『毎日新聞』を資料として通時的なコーパスを作成し、それに語彙調査を施して、基本語化した外

来語の候補をとりだすとともに、基本語化の類型を見出すことを試みる。

第１章では、通時的新聞コーパスから得た外来語について、その使用量の変動傾向を数量化して、基本語化した外来語の「候補」をとりだす。第２章では、それらの候補から 27 語を選んで、それぞれの類義語とともに、その使用量の推移を調査し、基本語化の量的な類型として、外来語が類義語を上回ってそれにとってかわる基本語化と、類義語に近づいて役割分担し共存する基本語化の、二つの類型を見出す。

第２部・第３部では、個別の外来語を選び、それらの基本語化を、外来語および類義語の具体的な意味・用法や、それらが現れるテクストタイプの違いなどを考慮しつつ詳細に記述することによって、20 世紀後半の新聞における抽象的な外来語の基本語化現象を、より具体的かつ多面的に把握することを目指す。第２部では「トラブル」、第３部では「ケース」をとりあげる。

第３章・第４章では、「トラブル」が、20 世紀後半、その意味・用法を３種６類にまで拡大させることによって、既存の類義語の上位語の位置に立ち、それまでの新聞語彙にはなかった「便利」な単語として成立したことを明らかにし、そうした基本語がそれまでの和語・漢語の類義語とは別に必要とされた背景に、20 世紀後半における新聞文章の概略的な文体への変化があるとする。

第５章・第６章では、形式名詞的な「ケース」が、20 世紀後半の新聞文章において、連体修飾節構造における客観的同格連体名詞という形式（用法）、とくに、≪（すでに起こった）良くないコトガラ（＝ケース）が〈多い／有る〉≫という表現において、類義語である「事例」「例」「場合」よりも多用されるようになる過程を記述し、「ケース」が、こうした新聞で多用される表現に特徴的に用いられる語として、類義の３語とは異なる役割を担う形で成立しつつあるという見方を提示する。

終章では、本論文の結論と意義をまとめるとともに、今後の課題と展望を記す。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来の外来語研究の多くが、外来語を語彙の周辺的な要素とのみ位置づけ、もっぱら、その「よそ者」的な性格に注目してきたのに対して、現在および将来の日本語において（少なからぬ）外来語が担いつつある新たな役割を見出したものであり、外来語研究の新領域を開拓したといえる独創性を有している。「20 世紀後半の日本語においては、具体名詞の外来語だけでなく、抽象的な意味を表す外来語の中にも基本語化したものがある」という事実については、すでに樺島忠夫氏の指摘などもあるが、それを「抽象的な外来語の基本語化」という一般的な語彙変化として定置したところに、本論文の価値がある。

また、本論文は、その方法論において、大規模な「通時的新聞コーパス」を独自に構築し、それに語彙調査を施して、外来語の基本語化現象をより広範にとらえようとする計量言語学的な側面をもつほか、抽象的な外来語の基本語化の様相を、当該の外来語と既存の和語ないし漢語が構成する類義語体系の変化ととらえ、外来語がそれら既存の類義語に取って代わったり、機能分担したりする過程を具体的に記述するという、語彙史研究としての視点もあわせもっている。さらに、本論文は、そうした外来語の基本語化が生じる要因をも探り、とくに、20 世紀後半における新聞文体の概略化傾向をその一つとしてあげるなど、文章・文体論とのかかわりも視野に入れている。こうした方法論上の特徴は、本論文の記述と分析を厚みのあるものとし、とくに「トラブル」「ケース」を対象とした事例研究は、本論文の水準の高さを示している。

ただし、いくつかの問題点も見受けられる。まず、「基本語化」という用語の意味するところが、「一定の言語使用領域において広範囲・高頻度に用いられるもの」という計量語彙論的な量的規定にとどまり、質的な側面について説明されていないという点である。このことが、通時的新聞コーパスを用いた語彙調査にもとづく量的な分析と、「トラブル」「ケース」を対象とする（これらの意味・用法にまで踏み込んだ）質的な側面をも重視する分析とが必ずしも有機的に結びついていない印象を与えてしまっている。また、論文中の用語の説明や概念規定にも必ずしも明確でないところがあり、たとえば、「外来語」や「新聞語彙」の範囲は、重要な概念であるだけに、明示する必要がある。このほか、語彙調査が形態素解析プログラムによる簡易なものにとどまり、結果の信頼性に問題が残ることなども不十分な点としてあげられる。とはいえ、本論文が、外来語の研究に新たな領域を切り開いたことは確かであり、これらの問題点もその価値を減ずるものではない（本論文の著者は、上記の通時的新聞コーパスの構築にあたって、（財）博報児童教育振興会「第３回ことばと教育研究助成」の交付を受け、その研究成果に対して優秀賞を授与されている）。

なお、2009 年 7 月 21 日に本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。